

## 発刊にあたって

淑徳大学学長 長谷川 匡俊

平成20年度は、グローバル経済の歪みが露わになった記憶されるべき年です。21年の年明け早々「年越し派遣村」の報道は衝撃的でした。雇用の危機が生活の危機をもたらす光景をメディアは一斉に映し出しました。世界同時不況の嵐が日本社会をも直撃し、先行きに強い不安感を募らせる象徴的な出来事でした。

卒業生の就職に影を落とす結果となったことは否定できませんが、採用内定取り消し者に対して卒業延期制度を設けたり、不況による家計逼迫への対応策として緊急学費減免奨学金制度を導入するなど、すばやい学生支援に努めました。

教学面で特筆すべきは、前年度末に中教審が発表した「学士課程の構築に向けて（審議のまとめ）」を受けて、教育の質の保証に向け、授業時間数の確保やシラバスの内容充実など具体的な改善・改革に着手したことです。また、前年度から組織的な取り組みを強化した地域貢献、社会貢献については、各キャンパスともに徐々に芽が出始めており、次年度以降が期待されます。

新規事業として法人が取り組んだものに、国際コミュニケーション学部・人間環境学科を基礎とする通信教育過程（人間環境専攻・こども教育専攻）の設置申請があります。指摘された改善事項をクリアして認可を受けたのが年末にずれ込み、学生募集の立ち遅れは大きな痛手となりました。一方、総合福祉学部では人間社会学科の22年度募集停止を決定し、新たにコミュニティ政策学部・コミュニティ政策学科の設置準備を開始しました。

ところで本年度は、国際コミュニケーション学部の新入生が、数名ではあるが初めて入学定員を割るという厳しい現実からのスタートでした。その緊張感なり危機感が教職員の間にもどれだけ浸透し、どれだけ改善・改革に反映したのか、それを知る手がかりとなるのが本報告書です。

むすびに、年報の執筆・編集を担当された役職者並びに大学自己点検・評価委員会の各位に謝意を表して、ご挨拶といたします。

2010（平成22）年2月